ドンドロ大師は、正式名を「どんどろ大師善福寺」。天王寺区空堀町。高野山真言宗の寺院で本尊は弘法大師。山号は如意山。院号は甘露院。

この場所にはかつて鏡如庵という寺があったが、明治時代に廃寺になり、明治42年に豊能郡にあった善福寺を移転した。昭和20年6月1日の空襲で寺院と本尊の薬師如来は焼失したため、戦後に本尊を弘法大師に改めた。本尊の弘法大師像、脇侍の愛染明王、不動明王、脇仏の如意輪観世音菩薩、薬師如来は戦後になって新たに造立された。

鏡如庵　鏡如庵は、宝暦2年(1752年)3月に高野山岩本院の法資法道の創建で、法道は大坂夏の陣の戦死者の霊を弔うためにこの寺を建てたという。鏡如庵のあった付近は、大坂冬夏の陣で激戦地になった所。
「どんどろ大師」の名称は、下総（茨城県）の古河藩主・土井利位（どいとしつら）（1789～1848）が大坂城代に在任中、屋敷が鏡如庵の近くにあり、鏡如庵に祀られている弘法大師に深く帰依したために「土井殿の大師」の名が起こり、ついにどんどろ大師に転訛したといわれる。

また、鏡如庵は、歌舞伎「傾城阿波の鳴門」の「どんどろ大師 門前の場」の舞台として設定され、巡礼姿の娘おつると母お弓の愁嘆を描いた場面が有名。

善福寺　大阪府豊能郡豊能町にあった高野山真言宗の寺院。伝承によれば推古天皇の勅願で聖徳太子が開創、広大な境内を有し多くの僧坊があった。本尊は薬師如来で、脇侍の日光菩薩 月光菩薩 、十二神将、及び厨子に納められた聖徳太子像を奉祀していた。創建以来度重なる火災で多くの堂宇を失い、明治に入ると、寺運は急速に傾いて、明治42年（1909年）に当地へ移転した。

傾城阿波の鳴門の話

近松半二の代表作の人形浄瑠璃「傾城阿波の鳴門」が大坂道頓堀の竹本座で初演されたのは、明和５年(1768)６月１日のことである。

判二は近松門左衛門に心酔、その名前を受けついだ座付作者。

1703 年（元禄 16 年）に発表された門左衛門の「曽根崎心中」で大坂町民の心を掴んだ人形浄瑠璃は、江戸中期のこの頃は凋落期を迎え、道頓堀二大座元の豊竹座は明和２年に、竹本座も「傾城阿波の鳴門」が発表された年に廃座に追い込まれる。この阿波鳴門は、人形浄瑠璃最盛期の最後を飾るものとなった。

大坂での活躍の場を失った人形遣いは、その後地方に流れていき、農村浄瑠璃として受けつがれていく。なかでもこの「傾城阿波鳴門」の巡礼おつるの物語は、今日でも阿波の徳島をはじめ、毎日のように各地の座によって演じ続けられており、人気狂言として生き続けているのである。

お家騒動　「傾城阿波鳴門」は、元禄の頃に実際に起こった阿波徳島藩のお家騒動を元に、浄瑠璃の狂言として書かれたもので、ちなみに実際にあったお家騒動とは、次のような話である。

当時阿波国では藍作と製塩が二大産業で米はつねに不足していた。武器と食料は他藩から譲り受けることは禁令とされていたが、藩では密かに久留米藩から肥後米を買い、それが幕府のお庭番の察知することになった。追い込まれた藩は関係した藩内の庄屋・坂東十郎兵衛という人物に罪をなすりつけ、家屋敷と田畑を没収、十郎兵衛は罪状もあきらかにされず、即刻処刑された――。

長大で難解なあらすじ　ところが「傾城阿波鳴門」は、実際のお家騒動とは全く別の、荒唐無稽で長大で難解な物語になっている。

阿波藩の藩主、玉木家の若殿が、高尾という傾城（遊郭の太夫）に溺れているのを幸いに、小野田郡兵衛という悪臣がお家横領を企てる。この騒動のさなか、家老桜井主膳のあずかる玉木家の家宝、国次の刀が何者かに盗まれ、桜井主膳は、元家臣の十郎兵衛に刀を探すように頼む。十郎兵衛と妻のお弓は、娘のおつるを祖母に預け、大阪へ出て盗賊の仲間になり、質屋などの藏に忍びこんで盗まれた刀を探す。

ある日、お弓が玉造りの十郎兵衛の隠れ家で針仕事をしていると、かわいい巡礼姿の女の子が門口にやってきて

一一、この巡礼の女の子が実は十郎兵衛夫婦の娘「おつる」で、それと知ったお弓が親子の名乗りをしようとするが、今は盗賊として追われる身、娘に災いがかかってはと泣く泣く見送ってしまう。ところが、それと知らなかった十郎兵衛がおつるを殺してしまうという哀しい運命の綾。

この後無事に刀は戻って、最初に出て来た傾城の「高尾」は実は阿波藩の先君の忘れ形見のお姫様だったという、水戸黄門のような驚きの幕切れになる。

ところで、今日でも浄瑠璃や歌舞伎で演じ続けられている、有名な巡礼おつるが出てくる「巡礼歌の段」は、全１０段中の８段目に当る部分の一部で、おつるはそれ以外のところには全く出てこない。それにおつるは全体の話の筋とは関係なく、今日では忘れられてしまった全体の話は、実はどうでもいいのです。

巡礼お鶴の物語　　ようやく「巡礼おつる」で、その有名な８段目の書き出しは、

「よしあいを。何と浪花の町はづれ。玉造に身を隠す阿波の十郎兵衛本名隠し…」

なるほど玉造は出てくるが、「どんどろ大師」が出てこない。どんどろ大師が出てこないことには、どんどろ大師の前の「おつるとお弓親子の銅像」の説明が出来ないのだが、銅像をよく見てみると、「歌舞伎　傾城阿波の鳴門　どんどろ大師門前の場」とある。

そうなんです、どんどろ大師が出てくるのは歌舞伎狂言なんです。

考えてみると、人形浄瑠璃の阿波鳴門が初演された 1768 年の頃には、玉造の鏡如庵はまだ「どんどろ大師」とは呼ばれていなかったのでしょう。どんどろ大師と呼ばれるようになるのは、鏡如庵に伝わる民間伝承を信用するとすれば、おそらく江戸時代の終りの頃、そのころの大坂では、人形浄瑠璃よりも歌舞伎のほうが隆盛で、歌舞伎狂言として作られた巡礼おつるの物語が、ご当地名所のどんどろ大師と結びつけられて「ドンドロ大師門前の場」が作られたのでしょう。

歌舞伎では、元の話を膨らませておつるが主人公の話に作りかえられたのです。

巡礼にお大師さんはつき物。道頓堀の歌舞伎で、巡礼おつるの健気でかわいい姿に涙を絞った善男善女は、老いも若きも巡礼姿に身を替えて、玉造の「ドンドロ大師」さんにお参りに行き、せめて不幸なおつるのために、尊い喜捨をするのです。

（参考資料）
「人形浄瑠璃の歴史」廣瀬久也
「近松半二浄瑠璃集二」国書刊行会
インターネット